

縮小社会研究会 第53回研究会



日時：2021年5月28日、19:00-20:30

オンライン(zoom) <https://us02web.zoom.us/j/89612948659?pwd=c2E0U1BMTVVFMlZUjI5Zz09>

パスコード：674547、ミーティング ID：896 1294 8659

日本の食料自給率は38%（エネルギーベース）であり、世界のどこかで何かが起これば壊滅的な混乱に陥る可能性があります。安全保障という見地からいうと食料の自給が喫緊の課題です。日本は海に囲まれ、海産物の食料に占める割合は大きいです。海と陸とはつながっており、水のみならず、栄養物質も循環し、この生態系の中で食べものとなる生き物がつくられています。持続的な食料生産には健全な海洋環境が不可欠です。これらの両立を可能にする生態系と相互作用をする人間の役割について、養殖の盛んな三陸のリアス式内湾を例として考えてみたいと思います。

里海 — 森は海の恋人か友達か —

講師：小松輝久

講演要旨： 持続可能な社会構築のための環境政策の推進にとって不可欠な科学的知見の集積及び技術開発の促進を目的とした、環境省の「環境研究総合推進費」の戦略研究、「S-13 持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理手法の開発」（代表：柳哲雄九州大学名誉教授）が2013年から5年間行われた。その中で、海面養殖が活発に行われているリアス式の内湾に通用する、健全な海洋環境と持続的な漁業生産を両立させることができる人手のかけ方、海の利用の仕方を開発することを目的に、宮城県志津川湾を対象として「テーマ2：開放性内湾が連なる三陸沿岸海域における沿岸環境管理法の開発」の研究をテーマリーダーとして行った。鉄・物質の循環、養殖による環境負荷、藻場分布を調べ、南三陸町、宮城県漁業協同組合志津川支所と持続的な養殖方法のシナリオを考え、シミュレーション研究を行い、WWF（World Wide Fund for Nature、世界自然保護基金）を含めおよびこれらの関係者と協議会をつくり議論した。その結果、リアス式の内湾における健全な海洋環境と持続的な養殖の実現には、陸を含む沿岸の一体的な管理が必要なこと、科学的な根拠に基づく合理的な養殖が不可欠なこと、エコラベルなどの役割が重要であることが明らかになった。



小松輝久さんの略歴 京都大学農学部卒業、京都大学助手、東京大学准教授、横浜商科大学教授を経て、日本水産資源保護協会技術顧問、国際エメックスセンター上席研究員、政府間海洋学委員会西部太平洋地域小委員会生態系ハビタットマッピングプロジェクトリーダー

参加登録： 松久 (h.matsuhisa@shukusho.org) まで連絡願います。非会員の方は、松久まで氏名と所属などをお知らせ願います。参加費は無料です。